

こごみ 日和73

特集：牛乳パックがハガキに大変身！

～紙すきを通して、ものの大切さを学ぶ～

大塚児童館

ごみ減会員さん訪問記「ごみ減の会員さんってどんな方？」:

日本写真印刷株式会社さん

Hand in Hand：燃やして埋めるごみの処分費用についてのウソ・ホント
opinion 日本環境学会 会長 瀬戸昌之 先生

なごみ日和：消し炭

KBS京都アナウンサー 海平 和



人と物と。織りなす「もっぺん」物語 第2回：

傘のお医者さん ピチ&チャブ ニシカワ

地域活動レポート：ごみを宝に

～松尾学区地域ごみ減量推進会議～



肌で触れ、仲間と共に考える 牛乳パックから学ぶ、ものの大切さ

ごみにまつわるこの数字なあに？

46.4%

答えはWebへ！

※トップページ「よもやま話 ごみ減のごみ袋」
をご覧ください。

「こごみ日和」は、京都市役所、各区役所・支所のエコまちステーション、京都市図書館、京都生協（市内店舗）などで手に取っていただけます。

最新号・バックナンバーもウェブで公開中！ <http://kyoto-gomigen.jp/>



手をとりあって ごみを減らそう！

京都市ごみ減量推進会議

Q ごみ減

検索



特集

牛乳パックが ハガキに変身!

～紙すきを通して、ものの大切さを学ぶ～
大塚児童館

8月上旬、夏休み真っ只中のこの日、山科区にある大塚児童館（大塚小学校内）には、子どもたちの賑やかな声が響き渡っていました。大塚児童館での紙すき教室は、今回が初めて。1年生から5年生まで、45名が集いました。講師は、京都市ごみ減量めぐくん推進友の会（以下、めぐくん推進友の会）の皆さん、総勢8名。「上手できるかな?」「紙すきってどんなのかな?」子どもたちの顔からは、緊張と期待が伝わってきました。

牛乳パック1枚が、ハガキ2枚分に

まず初めに、めぐくん推進友の会の副会長 高橋かつ子さんから、始まりの挨拶と紙のすき方の説明がありました。「牛乳パックは、とても良い紙でできているので、お家で飲んだら、洗って開いて乾かして、近くのスーパーなどの回収ボックスに持って行ってね。1枚の牛乳パックからは、ハガキが2枚できます」との呼び掛けに、たくさん子どもがうなずきます。今回は時間の都合で干せないこともあり、すき上がったハガキが十分に乾かないので、「お家に帰ってもう一度本などに挟んで平らになるように重しをして乾かして下さいね」と、注意点も伝えます。「自分ですいたハガキを誰かに送ってもいいし、家族にお手紙を書いて、メッセージカードとして渡してもいいし、上手に使ってね」。高橋さんは、やさしい言葉で語りかけます。このように、めぐくん推進友の会が、毎年、紙すき教室をい



子どもたちに語りかける高橋さん

ろんな場所で開催する理由は、身近な牛乳パックがハガキの材料として生まれ変わることで、「紙は再利用できる貴重な資源」であることを子どもたちに伝え、実体験を通して楽しく学んで欲しいという、大きな願いがあるからです。

牛乳パックからパルプを取り出す

紙すき教室は、児童館や子どもたちが牛乳パックを集めて、原料となる再生パルプをつくることから始まります。大塚児童館ではまず、7月の児童館便りで、「牛乳パックを一人1パック、持って来て下さい!」と各家庭に呼び掛けました。その反響はとても大きく、全部で90枚程集まり、中には、一人で5パック持って来たよ!と教えてくれる子どももいました。それらの牛乳パックを、水を張ったバケツに1週間程浸け、柔らかくなったものから順番に、両面のポリエチレンのラミネート材を剥がしました。これは、細かな作業なので、先生とボランティアの皆さんが中心となって担当しました。ポリエチレンのラミネート材を剥がすと、中から白い紙が出てきます。これが再生パルプの原料です。子どもたちは約2週間、この紙を細かくちぎる作業を頑張りました。紙を細かくちぎればちぎる程、繊維が

ほぐれ、すいた時に綺麗な紙になるそうです。

紙すき教室の当日、めぐくん推進友の会の皆さんが、細かくちぎった紙に、水を加えてミキサーにかけ、更に細かく、ふわふわのパルプに。

紙すき教室の準備は、これだけではありません。ハガキに絵柄をすき込めるように、可愛い紙ナフキンを適当な大きさにちぎって準備をしておきます。また、出来上がったハガキが折れ曲がるのを防ぐため、カレンダーの裏紙で



ふわふわのパルプが、とっても気持ちいい

二つ折りのハガキケースも作ります。更に、アイロンの熱で乾かしたハガキは非常に熱いので、子どもたちがやけどをせず持って帰れるよう、ハガキ大の段ボールの板も作りました。これらの準備物は、子どもたちと一緒に児童館

の先生方が用意しました。紙すき教室は、参加するみんなが協力し、手間ひまをかけて作り上げる、学びの場なのです。

いよいよ、紙すき体験!

紙すき体験は、4～5名ずつ、6班に分かれて行われました。それぞれの班には、めぐくん推進友の会の皆さんが講師として付き添い、道具の使い方からすき方のコツまで、一人ひとり丁寧に教えてくれました。すき上がった紙は、型の中でぎゅっと水気を絞り、更にタオルにはさみこみ、麺棒を押し当てながら余分な水分を取り除きます。その上で、講師が一枚一枚アイロンで乾かして、出来上がり。まだ熱いほかほかの紙を、カレンダーの裏紙に挟み、更に段ボールの板でしっかりと挟んで持ち帰ります。中には、児童館の先生のためにハガキ作りを積極的に手伝う、頼も

しい子どももいました。参加した子どもたちは、お互いにハガキの絵柄を見せ合ったり、誰に手紙を書くかを相談したりと、思い思いに紙すき体験を楽しんでいました。



すいたハガキの水気を取り、アイロンで乾かします

最後に、めぐくん推進友の会の会長 山内寛さんから、子どもたちの頑張りへの感謝と、牛乳パックを大切に、そして飲んだらリサイクルして下さいね、とまとめの挨拶がありました。記念撮影の後、片付けをする私たちの姿を見て、「ありがとう」「また来てね」と声を掛けてくれる子どもたちの優しさに、心あたまる場面もありました。後日、大塚児童館の子どもたちから、「牛乳パックからはがきが作れてびっくりした」「細かくやぶった牛乳パックの切れ目の跡がなかったので、びっくりした」「可愛い絵柄がたくさんあって楽しかった」「また紙すきをやりたい」等の

嬉しい感想が寄せられました。紙すき教室の準備にご尽力下さった児童館の先生方や、めぐくん推進友の会の皆さんの願いが、子どもたちへ、確かに伝わったのではないのでしょうか。

取材の中で、「牛乳は飲むけど、牛乳パックをお店などの回収ボックスに持って行ったことはない」という声を少なからず聞きました。これからは、紙すき教室で勉強したことを思い出して、牛乳パックを回収ボックスに持って行ってね。さあ、お手伝いの輪を広げようよ!

京都市大塚児童館（社会福祉法人 洛和福祉会） 住所▶京都市山科区大塚野溝町56（大塚小学校内）

牛乳パックのリサイクル ちょっとメモ

牛乳パックなどの飲料用紙パックの原紙使用量（国内向け）は、19万6千トンにも上ります（2015年、全国牛乳容器環境協議会資料より）。その内、主に紙パックメーカーや飲料メーカーから回収された紙パックは、全体の約4割。スーパーなどで店頭回収される、家庭からの使用済み紙パック回収率は全体の約3割で、まだまだ「ごみ」として捨てられている現実が伺えます。

お茶やジュースの紙パック（裏が白いもの）や、500mlや200ml等の小さなパックでもリサイクルできますので、「洗って・開いて・乾かして」というひと手間をかけて、資源として再利用したいですね。

*京都市の学校給食で子どもたちが飲んで集めた牛乳パックは、トイレットペーパー（めぐレット）にリサイクルしています。

*京都では、京都生協の店頭等でアルミ蒸着の紙パックも回収されています。

松村香代子（平成29年8月4日取材）



会社を強くする環境活動 ～グローバルに展開する 日本写真印刷の環境マネジメント～

日本写真印刷株式会社

総務部 環境安全グループ長 麻埜 豊彦さん

昭和4（1929）年、高級美術印刷会社を志向し、京都・壬生の地で創業した日本写真印刷株式会社。近年は、印刷技術を応用し、産業資材やタッチセンサーの分野で国内外において大きく業績を伸ばしています。現在、国内16、海外42の拠点を持つグローバル企業に成長を遂げました。

同社は、平成17（2005）年下期に初めて本社でゼロエミッション^{*1}を達成、その後、平成21年度には国内グループ全体でも再生・再資源化率が99.5%となり、平成24（2012）年まで連続でゼロエミッションを達成しています。今回は、同社の環境活動を牽引してこられた総務部環境安全グループ長の麻埜豊彦さんに、環境マネジメントや、ゼロエミッションに向けた取組についてお話を伺いました。



麻埜 豊彦さん

経営・事業活動とリンクした環境活動

「企業の環境活動は会社のためになるものでなければならぬ。経営と直結していないような環境活動はダメですね」。そう話す麻埜さん。

現在同社は、ISO14001^{*2}の規格に、“安全衛生”を統合した独自の「環境安全衛生マネジメントシステム」を構築し、環境活動に取り組んでいる。以前、同社の環境の取組は、事業活動とは別物という捉え方をしており、“環境パフォーマンスを高める”ことが最大目的になっていた。しかし、平成24（2012）年に環境マネジメントシステムの見直しが行われ、「経営・事業活動との密着」という視点を取り入れて、以後、“事業の成長に結び付く環境活動”を目指して取組を推進している。

「『仕事の生産性を高め、品質改善（ロスを低減）することが、すなわち“廃棄物削減”である』と日々言っているのが、意識は社員の中になかなか根付いていると思います。しかし、ここに至

ゼロエミッション実現に向けての取組

具体的に取り組んだのは「3Rの推進」と「廃棄物の分別」。まず手掛けたのは、社内で発生するすべての廃棄物の内容・種類・数量を把握。並行して、リサイクルルート（処理業者）開拓にも取り組み、種類に応じて廃棄物分別の細分化を実施した。社内の廃棄物の分別を徹底させるためには、全社員の協力が不可欠である。そこで、分別のためのルールや方法を細かく定め、イラストや図を使ってわかりやすく表示した廃棄物管理マニュアルを作成した。各部署には分別回収ボックスを設置し、全社の廃棄物が集まる分別集積場を整備。廃棄物の管理は、部門単位で行うため、各部署の部長を管理責任者に、その下に管理推進員を置いた。そして、説明会を実施して社員教育を行い、不明点が出てきた場合に備えて相談窓口も開設した。

こうした万全の体制を敷いて分別の徹底を図ったものの、なかなか分別違反がなくなり、対策として、集積場での分別確認や、廃棄物パトロールを行ったという。やがて、少しずつ分別が浸透していった。

その後、廃棄物の管理には、バーコードひとつで、「どこから」「どんなごみか」「どれだけ」排出されたかが記録される電子秤「廃棄物計量管理システム」を本社エリアに導入。これによって、

るまでには「ISOを維持するために活動しているのだろうか」と思うような時期もありました」と麻埜さんは振り返る。

企業にとって、ISO14001を取得することは、環境リスクの低減やコスト削減など、さまざまな効果が挙げられるが、最大のメリットは「企業価値の向上」だろう。認証取得がそのまま「環境保全に貢献している企業」の証となり、顧客に企業の信頼性を示すことができるのだ。海外企業には、ISO取得が取引要件になっている企業も少なくない。同社がISO14001の認証を取得したのは平成13年のこと。まず本社で取得、以後、平成19年までに国内の全拠点で取得している。ISO14001取得をきっかけに、「ISO推進部」を設置して社内の環境推進体制を整えた。そして、最重要課題の一つに「廃棄物の管理」を掲げ、全社一丸となって「ゼロエミッション」に向けた取組を開始した。

一元管理できると同時に、部署名を書いたシールを貼って出すので、分別違反が目に見えて減少するという効果も見られた。

ISO14001認証には、定期的な維持審査があり、構築した仕組みが機能しているか、企業の継続的な努力や姿勢がチェックされる。いただいた“お墨付き”を傷つけてはなるまいと、いつしか環境活動の目的が「ISOの維持」になっている側面が見受けられた。麻埜さんは「それまでは、各職場でごみの量を自主的に計って集計していたのですが、工場もオフィスも営業部門も全ての職場が同じ条件で同様に取り組んでいることが、少しおかしいなと思っていた」という。

こうした形骸化を防止するため、平成24（2012）年にISOの認証範囲を絞り込み、営業や総務に関する再資源化率の目標を外し、生産部門のみに絞り込んだ。



手元の簡単な操作で一元管理できる電子秤

廃棄物は宝の山～細分化して廃棄物を資源に

ここで少し麻埜さんの話をしよう。入社以来、営業畑一筋に歩いてきた麻埜さんが、平成14（2002）年春、突然、本社の環境管理グループ（当時）に異動を言い渡され、廃棄物管理の担当になった。「ずっと営業の第一線で数字を追いかけっていたのに廃棄物担当か…」と、ちょっと腐ったという。そんな時、京都工業会で出会った人からこんな言葉をかけられた。「廃棄物って宝の山でしょ。それでどれだけ事業にも貢献できるのか」と。この言葉で廃棄物に対する考えが一変した。「しっかり取り組めば、おもしろいかも」。麻埜さんにとって、これが環境活動を推進するモチベーションになった。平成15年の時点で、すでにゼロエミッションの取組は始まっていたが、当時の再資源化率は70数%に過ぎなかった。麻埜さんは「俺が2年で達成してやる!」と心に決めたという。実際その2年後の平成17年、同社の再資源化率は99.5%を超え、初めてゼロエミッションを達成した。

廃棄物のほとんどは、丁寧に分別すれば、資源として再利用できる。お金を出して引き取ってくれる「有価物」にもなり得るのだから、廃棄物はまさに「資源の山」「宝の山」である。

同社の廃棄物処理の流れを紹介しよう（右上表参照）。同社では廃棄物は3つに分類している。再生可能紙や金属くずなどは【有価物】としてそれぞれの回収業者が買い取り、再生紙や鉄材料などに再利用される。その下の【産業廃棄物】は有価物とはならない廃



細かく分離され業者の回収を待つ廃棄物

廃棄物リスク管理で企業価値をサポート

「私の部署は『環境安全グループ』という名称なんですけど、ごみを減らすことよりもむしろこちらに力を入れています」と言うのが、「廃棄物リスク管理」。想定されるリスクとしては「廃棄物による事故や災害」、「法令違反・委託先業者の不正」、「機密情報の漏えい」などが挙げられ、いずれも大きな信用失墜につながる。委託先で発生した事故や事件であっても、排出者責任を問われるので、回収・処理業者などの委託先を適正にチェックすることは重要である。同社では、委託先の管理台帳や規定を作り、契約前の視察はもちろん、定期的に内部監査を行い、指導・管理を徹底。また、1つの廃棄物に対して2社以上と契約を結ぶ二社購買を実践している。委託先選定の際にも、厳しい基準を定め、それに沿って適正な業者を選定しているのが、委託業者の意識向上にもつながっている。そして、大切なのは、委託先とのパートナーシップ。共に、リスクを防止し、ゼロエミッションを推進していく上では、相互に情報を提供しあえる良好なコミュニケーションを保つことが重要である。

最後に、読者の皆さんへのメッセージをお願いしますと、「ど

棄物、つまり処理費用を支払って再資源化しているもの。そして再資源化されない焼却ごみ（一般廃棄物）や汚泥【単純焼却・埋め立て】に。同社の平成28年度の数値は、国内グループ全体の廃棄物の総排出量11,339 t、うち【有価物】が全体の39.2%、【産業廃棄物】が58.3%、【単純焼却・埋め立て】は2.5%。新しい工場のスラッジ^{*3}が埋立てに回ったため、再生・再資源化率は97.5%となり、平成28年度はゼロエミッションの目標は未達成に。それに対する改善取組で、平成29年度は再びゼロエミッションを達成する見込みだそう。

有価物の比率を上げるためには、プラスチック類（ラミネート加工、ビニール加工等）を材質ごとに分けるなど、より細かな分別が必要となる。そこで、子会社であるシェアードサービスが廃棄物の処理及び清掃に関する法律に基づく許可をとり、有価物と廃棄物の分別業務を委託することにした。現在、有価物を売却した収入は、その有価物を出した部署と子会社が折半するルールになっているという。

「私の部署は『環境安全グループ』という名称なんですけど、ごみを減らすことよりもむしろこちらに力を入れています」と言うのが、「廃棄物リスク管理」。想定されるリスクとしては「廃棄物による事故や災害」、「法令違反・委託先業者の不正」、「機密情報の漏えい」などが挙げられ、いずれも大きな信用失墜につながる。委託先で発生した事故や事件であっても、排出者責任を問われるので、回収・処理業者などの委託先を適正にチェックすることは重要である。同社では、委託先の管理台帳や規定を作り、契約前の視察はもちろん、定期的に内部監査を行い、指導・管理を徹底。また、1つの廃棄物に対して2社以上と契約を結ぶ二社購買を実践している。委託先選定の際にも、厳しい基準を定め、それに沿って適正な業者を選定しているのが、委託業者の意識向上にもつながっている。そして、大切なのは、委託先とのパートナーシップ。共に、リスクを防止し、ゼロエミッションを推進していく上では、相互に情報を提供しあえる良好なコミュニケーションを保つことが重要である。

ほとんど変えていくことですね。規約でも、委託業者でも、改善できることがあれば変えていく。変えることを怖がらない。そのためには、世の中の動きに敏感であることが大切です。「環境活動は会社のため」というベースさえあれば、変えることが、「会社を強くすること」に結びつくと思っています。取組を始めて2年でゼロエミッションが達成できたのは、現状に満足せず、次々と「見直し」と「改善」を繰り返して、攻めの姿勢で取り組んできたからに違いない。廃棄物という宝の山で、どこまで「事業に貢献する」ことができるか。同社と麻埜さんの挑戦から目が離せない。



本社敷地内に設けられた廃棄物分別集積場

日本写真印刷株式会社 住所▶〒604-8551 京都市中京区壬生花井町3 http://www.nissha.com TEL. 075-811-8111 (大代表)

「NISSHA（ニッサ）株式会社」へ社名変更

同社は昭和4（1929）年に高級美術印刷を志向し、京都で創業。1960年代以降は、印刷技術を進化させながら新製品開発に取り組み、転写箔や電子部品など製品群の拡充を図る一方、1990年代後半頃からグローバル市場への進出により、高い成長を実現してきました。現在は、これらに加え、印刷関連資材や自動車内装部品、医療機器など、グローバルベースで成長が見込まれる分野への事業展開を進めています。

このように同社の事業は従来の印刷の領域を超えて大きく進化・拡大していることから、平成29年10月6日、日本写真印刷株式会社をNISSHA株式会社へ変更します。

*1 生産や廃業に伴って発生する破棄物を、他の産業や製造工程で資源として再利用することによって、産業から排出される廃棄物ゼロを目指す活動。同社では、再生・再資源化率99.5%以上をゼロエミッションと定義している。

*2 環境マネジメントシステムの国際認証で、企業の活動を通して発生する環境負荷を継続的な取組で低減される仕組みを備えた組織に対して与えられる。

*3 下水処理や工場廃水処理などの過程で生じる沈殿物。汚泥。

日本環境学会 会長 瀬戸昌之 先生に聞く ～燃やして埋めるごみの処分費用についてのウソ・ホント～

にっこり笑うやさしい笑顔が、政府や自治体のごみ対応の話になると、まさに鬼の形相!?今回は、日本環境学会の大親分、いや、会長である瀬戸昌之先生に、全国の自治体を見てこられた知見から、日本のごみ問題の現状について伺いました。

ごみ処分は誰の責任?

家から週に数回出している「家庭ごみ」。家庭ごみは自治体が処分し、処分費用は税金のほか指定有料袋などに含めて徴収。一方、事業系ごみは排出者(事業者)の費用で処分。ただし、事業者が自治体のごみ焼却場へ直接持ち込む「事業系一般廃棄物」も、全体の1~6割含まれるとか。しかも、この持ち込みごみの処分費用は事業者が収集運搬業者へ委託して処分する場合に比べ、運搬費用がかからないため事業者にとっては格安!だから、事業者から見ればかなりお得(とんとん持ち込む)となるわけです。

「燃やして、埋める」 ごみ処分費用のここがおかしい!

「家庭ごみを市民からの税金で処分するのは理解できますが、事業系ごみの処分費用まで市民からの税金を投入して処分するのは不適切ではないか」。瀬戸先生は続けます。「環境省によると、全国の自治体で毎年4400万トンの一般ごみを1.9兆円の税金を使って処分しているから1トン当りの全国的な平均コストは4.3万円などと言っている。でも、これって、事業系一般廃棄物も1~6割含まれているわけだし、焼却炉の建設費や国費の補助も含まれていないんだよ。これらを含めると1トン当たり7~18万円ぐらいになるって計算。さらに、燃やして埋めているのは、このうち7割だから、結局、ごみ処分の長期的費用は1トン当たり11~25万円になってしまう。」

焼却処分とたい肥化。 公益的価値を考えれば?

「ごみ処分費用はホントは1トン当たり11~25万円もかかる。さらに、焼却灰がもたらす地下水の浄化費などを含めると、処分費用はもっと高くなるんだ!」と環境省の公表内容をバツサリ。さらに、「近年、生ごみのたい肥化を実施している団体があるけど、例えば、NPO法人緑の会(茨城県取手市)の実績を見ると、だいたい1トン当りの生ごみをたい肥化するために16万円の費用が必要になる。自治体の平均処理コスト4.3万円と比べればたい肥化はかなり割高と誤った判断につながる。でも、ホントのコスト11~25万円と比べれば、たい肥化はずっと安いんだ。そ

れに、たい肥を土壌に戻せば土壌保全や洪水抑制などの公益的価値が生まれる。この恩恵を考慮すれば、たい肥化のコストは16万円よりも、もっと安くなるのだ!

「燃やして、埋める」のに11~25万円もかけるのであれば、たとえば、たい肥化やりサイクルでもっと安価にできるほうがいいし、さらに、たい肥化の事業を行うことによって、年収400万円の雇用が約十万人生まれるではないか」瀬戸先生は語気を強めておっしゃいました。

拡大生産者責任こそ ごみ問題解決の切り札!

拡大生産者責任(EPR*)は、OECD(経済協力開発機構)が提唱するすべてのごみの公正な処分法。簡単に言えば、メーカーは製品価格に使用後の処分費用を含めなさいということ。「日本ではEPRの真逆をやっている。つまりパソコンや家電、自動車、ペットボトルなどを捨てる時に処理費を払えと言う。これでは、不法投棄が起こるのは当然だ。日本政府は企業に甘すぎ!!これじゃ、ごみ問題は何も解決しない!」瀬戸先生率いる日本環境学会は、消費者目線で、このような矛盾を徹底的に追及します。

*EPR: Extended Producer Responsibility

高野拓樹(平成29年8月10日取材)

このコーナーでは、環境問題やごみ減量への取組について、さまざまな立場の方からのご意見を紹介します。



瀬戸昌之 先生(東京農工大学名誉教授・理学博士)日本環境学会会長、日本学術会議会員(19期)

なごみ
日和



KBS 京都 アナウンサー
うみひら なごみ
海平 和

●●第15回 「消し炭」●●

今年も8月16日、京都ではご先祖様を送る五山の送り火が行われました。KBS京都では特別番組として「五山の送り火 生中継」を放送していて、私も入社以来、毎年、右京区嵯峨の鳥居形松明の送り火の様子を伝えていました。ですが今年も番組の担当ではなかったので、家族で送り火を觀賞することに。北山通を歩きながら松ヶ崎妙法・船形万燈籠を望むことができました。

幼いころから松ヶ崎妙法を見ることが多かった私ですが、徐々にゆっくと家族と心静かに眺めていると、やはり自然と手を合わせたくなりました。人とのつながり、またご先祖様とのつながりを感じられるからこそ、あたたかく力強い炎なのかもしれませんね。

そして今年も、初めて送り火



海平 和: 京都市出身、2010年KBS京都入社。テレビ「京スポ」「news フェイス」、ラジオ「栢木寛照熱血説法こころのラジオ」などに出演中。

翌日の消し炭拾いを経験しました。お精霊さまを送ると同時に、健康や家内安全なども祈る送り火には、様々な言い伝えがあります。盆に送り火の文字をうつすと無病息災。加子に穴をあけて大文字をみると眼がよくなる…など。

その1つが「消し炭」。送り火を焚いた後の松明の炭。浄火によって焚かれた松明、炭もやはり浄化されたものとの信仰があり、翌朝以降に求めて登る人が多いのです。半紙に包んで玄関に掛けておくと魔除けになるとの言い伝えがあり、今年初めて母親と「法」が灯された、大黒天山に登ってきました。大黒天山は普段は入山が禁止されているのですが、送り火の翌日、8月17日だけ消し炭拾いに登る方のために山に入ることが許されるのです。

標高187メートルの小さな山ですが、まだ残暑の厳しい日差しが照りつける今年の8月17日、母と汗を流しながら歩いていると、たくさんの方がこんにちと声をかけてくださいました。これも送り火がつながり人との縁。「法」は63基の尖床で灯されています。そこから消し炭を頂き、今、我が家の玄関に掛けています。家族と共に見ることができた感謝と共に、また今年も京都の夏が終わりました。



人と物と。 織りなす「もっぺん」物語



第2回

傘のお医者さん ピチ&チャプ ニシカワ

6月、梅雨のある日、耳にしたちょっといい話。その人は骨が折れた傘を修理してもらったと笑顔で話された。

京都府の年間降雨日は*106日だという。出番の多い傘。しかし、傘は故障が絶えない。スーパーなどの売場には傘がズラリ並ぶ現代、故障した傘は捨てて、新品を購入するのが手取り早いのだが…。

京都には、高名な傘のお医者さん「ピチ&チャプ ニシカワ」があるというので、そちらを訪ねた。店には洋傘やレインウェアが並べられている。創業は明治40年。もとは和傘や提灯を手がけていたが、時代とともに洋傘、レインウェアを扱うように。1970年代以降、流通や消費形態の変化とともに、傘の修理を扱う店舗が減り、各地から依頼が舞い込むようになった。北海道から九州まで常時約200本を抱える。

この日、「持ち手が外れた」と駆け込んで来た人がいた。40年前、修学旅行のために用意した折り畳み傘。赤のチェック柄が気に入って、今も愛用されている。先生は、早速、夥しい数の持ち手のストックの中から、「これがええやろ」と1つを選び取り替えた。その間5分ほど。その人は修理代を払い「ありがとう」の言葉を残して店を辞した。傘のお医者さんを務める西川さんは今年84歳。これからもお健やかに傘の修理をお願いしますよ。

▶ピチ&チャプ ニシカワ 京都市中京区西ノ京南聖町21 ☎075-841-0165

修理するより新品を買った方が手取り早い…。たしかに修理・修繕には、お金も時間もかかる。人の物への関わりが希薄になっている現代、このシリーズ企画では、京都のごみ減量推進会議の取組である「もっぺん」という事業の意義を問い直すため、修理や修繕を担うプロを訪ねます。

*総務省統計局2010年「統計でみる都道府県のすがた2013」

森田知都子(平成29年8月1日取材)



手慣れた技で修理する西川誠太郎さん

修理に備え持ち手を多品種ストック。その他の部品も貯蔵

地域活動レポート

～松尾学区地域ごみ減量推進会議～

ごみを宝に

松尾大社から南へ1kmほど歩いたところに、緑豊かな「松室やすらぎの庭」があります。苔寺、鈴虫寺に隣接するこの場所は、季節で移り変わる草花を楽しむことができ、さらに梅雨の時期には虫を見ることができる落ち着いた庭園です。今回はこの場所で、松尾学区地域ごみ減量推進会議(以下、ごみ減)の会長 荒木祐靖さん、松尾自治連(以下、自治連)の会長 荒木康俊さんにお話を伺いました。



燃やせばごみ、ごみから宝に

松尾学区では、地域の一斉清掃が年5回行われており、それぞれ自治連や少年補導などが主体となって、幅広い年代の方が参加されています。松尾山や桂川に囲まれ、世界文化遺産の西芳寺(苔寺)もある自然豊かなこの地では、一斉清掃で集められるごみの大半が落ち葉でした。これをどうにかしたいと始まったのが、落ち葉のたい肥化です。落ち葉や雑草などを入れて、簡単な作業だけでたい肥ができるタヒロンという容器を購入し、たい肥作りを開始したのは4年程前から。公園内の落ち葉のたい肥化を始めた当初は2個だったタヒロンも、現在では13個がフル稼働しており、従来ごみになっていた落ち葉や雑草が、今では貴重なたい肥として活かされています。「お金を使って燃やすのはもったいない、活用できないかと思って出会ったのがたい肥化でした。たい肥にすることで、ごみだった落ち葉は、宝になりました」と、ごみ減会長の荒木祐靖さん。

そのたい肥の活用として始められたのが、かつては自生していたフタバアオイの保護・育成です。フタバアオイは、毎年5月に行われている松尾大社「還幸祭」において本殿、楼門をはじめ神職の方の冠・烏帽など全ての飾り付けとして欠かせないものなのですが、その採取量が減少していることから、松尾大社への奉納を目標に掲げて始められました。この取組は、平成27年8月には京都の祭りや文化を支えてきた生きものの保全・再生を実施す



る団体の取組を京都市が認定し、支援する事業である「京の生きもの・文化協働再生プロジェクト認定制度」に認定されました。そして平成29年4月には目標であった松尾大社「還幸祭」に初めて奉納することができました。「今年は10株の提供でしたが、来年はさらに数を増やしていけるようにしたいです」とごみ減会長の荒木祐靖さん。松尾地域ごみ減が生み出したい肥は、今後も活躍の場が約束されています。

ごみ減量を広げるために



松尾地域ごみ減の活動は、清掃やたい肥化だけにはとどまりません。使用済てんぷら油の回収や毎月行われているコミュニティ回収、環境に関する学習会の開催や、フリーマーケット・バザーの実施、環境関連施設等の見学など多岐に渡ります。自治連会長の荒木康俊さんは、「ごみを減らしたいという思いは、昨年度に訪問した『エコランド音羽の杜』を実際に見ることでより一層強くなり、一緒に行ったメンバーみんなが共通の思いを持ち帰ることができた貴重な時間でした」と言われており、様々な角度から地域の方へごみ減量の大切さを伝えられています。

また、多くの方にごみ減量の意識を持って行動してもらいたいという思いから、学区内で年2回開催されているイベントのブース出展、ごみの分別クイズなどを行い、幅広い年代の参加者にゲーム形式で楽しく分別を理解してもらうきっかけとなっています。そこでは、ごみを出さない、再利用をキーワードに趣向を凝らしたものが提供されており、毎回多くの参加者で賑わっています。

豊かな美しい自然に囲まれた、歴史ある松尾学区。庭園という貴重なフィールドは、地域の方の憩いの場だけではなく、ごみをたい肥に変え、伝統的な祭りを支えるフタバアオイの生息地としての機能も追加し、さらに魅力が高まっています。ごみ減会長の荒木祐靖さんは「将来的には、各家庭でもフタバアオイを育ててもらうことで、家庭での生ごみのたい肥化などごみ減量にも繋げていきたい」と、今後の展望を話してくれました。今後どのように活動が広がるのか、目が離せません。

前田 綾 (平成29年7月31日取材)

今年度のイベント予定 (場所はいずれも京都市立松尾小学校)
10月22日(日) にこごみフェスタ in 松尾
12月9日(土) クリスマス in 松尾